

# 条件表現に現れる遂行モダリティの条件形態

－日本語と韓国語の対照の観点から－

金慶恵\*

kimkyounghye@hanmail.net

## 〈目次〉

- |                        |                  |
|------------------------|------------------|
| 1. はじめに                | 4. 「なら」条件文とモダリティ |
| 2. 条件表現を表す表現形態の類型別分類   | 5. 結論            |
| 3. 条件文に現れる遂行モダリティの条件形態 |                  |

主題語: 条件表現(Conditions expressed), 遂行モダリティ(Performativity Modality), 「ば・と・たら・なら」(ba·to·tara·nara), 「-면」(myeon), 「-거든」(geodeun)

## 1. はじめに

一般的に、条件文とは条件表現を表す形態が現れる文を指し、話し手が過去の経験による一般的な推測をする場合も条件文として成立する。このような表現に現れる表現形態は、日本語の場合は「ば・と・たら・なら」であり、韓国語の場合は「-면(myeon)」と「-거든(geodeun)」が原形になった組み立て式の形態である<sup>1)</sup>。日本語と韓国語のそれぞれの形態の使い分けは微妙に違うが、それは別々の条件の類型を持っているばかりでなく、韓国語は組み立て式形態の意味用法の相互作用から現れる現象である。

本稿では、日本語と韓国語の条件表現を表す形態が話し手の意図を表す文末表現とどのように関わっているかに焦点を当て、以前の述べ立てモダリティの条件形態の研究に引き続き<sup>2)</sup>、遂行モダリティの条件形態について考察していくことにする。

\* 仁川大学校 師範大学 日語教育科 教授

1) 金慶恵(2009)「日本語と韓国語の条件表現の対照研究」首都大学東京人文科学研究科, 日本語教育学博士学位論文, pp.340-363に詳しくまとめている。

2) 金慶恵(2013)「対応する韓国語の形態から見た日本語の条件表現を表す形態の表現意図-述べ立てモダリティを中心に-」日本語文化第26輯, 韓国日本語文化学会

## 2. 条件表現を表す表現形態の類型別分類

条件表現を表す表現形態を分類する場合は、条件の対象によって分類することもできるが、日本語も韓国語も条件表現の文末表現はモダリティ表示による場合がほとんどであり、文末のモダリティ形式を基準にして分類するのがもっとも妥当性が高い。

仁田義雄(1989)では、発話・伝達のモダリティの下位タイプを、「働き掛け」、「表出」、「述べ立て」、「問いかけ」の4種類に分類した。本稿では、仁田義雄の「働き掛け」と「表出」は聞き手の行為を要求したり、話し手の行為を拘束するなどの遂行を伴うので、「遂行モダリティ」とし、「述べ立て」と「問いかけ」は併せて「述べ立てモダリティ」と命名する<sup>3)</sup>。このような命名は条件文の役割によるもので、「前件が成立すれば実現される」という「述べ立てモダリティ」的な構文と、「前件が成立するなら、後件を実現させろ」という「遂行モダリティ」的な構文があるからである。本稿では、条件形態とモダリティとの共起関係を考察するにあたって、仁田義雄(1989)の分類を、<表1>のように、簡略化して考える。

<表1>

仁田義雄の分類によるモダリティの下位タイプ		簡略化
働き掛け	(1) 命令 (2) 誘い掛け	遂行モダリティ
表出	(1) 意志・希望 (2) 願望	
述べ立て	(1) 現象描写文 (2) 判断文	述べ立てモダリティ
問いかけ	(1) 判断の問いかけ (2) 情意・意向の問いかけ	

多くの言語において、事実を表現する場合はモダリティを表示しない。日本語も過去に発生した二つの事態をつないで述べる場合はモダリティを表示しないので、1)と2)のいうに、前件と後件が事実をありのままに述べる「条件-結果」関係にある因果関係の文ではモダリティを表示しない。

3) 仁田義雄(1989)「現代日本の文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお, p.22では<働き掛け>と<表出>はテンスを存在・分化させる点で共通性を有しており、<述べ立て>と<問いかけ>はテンスを存在・分化させない点で共通性を有していると述べている。

- 1) 信子がドアの前に立つと、ドアが開いた。
- 2) 火事の跡を見に行ったら、何か光るものがあった。

しかし、「と」と「たら」は、3)と3-1)のように、述べ立てモダリティと共に起して次のような表現を表すことができる。

- 3) 二階に上がると、もっとよく見える。
- 3-1) 二階に上ったら、もっとよく見える。

しかし、4)と4-1)のような遂行モダリティの場合は、「と」は共起しにくい。

- 4) 東京に来たら、まずこれを買え！
- 4-1)×東京に来ると、まずこれを買え！

また、「ば」と「なら」は、5)と5-1)のように、命題内容領域<sup>4)</sup>にとどまることができない。

- 5)×行って見れば凄かった。
- 5-1)×行って見るなら凄かった。

「ば」と「たら」の場合、「たら」は問題ないが、「ば」は、6)のような述べ立てモダリティとは共起するが、7)のようなモダリティとは共起において不自然さが残る。

- 6) 問題なければそれでいいよね。
- 6-1) 問題なかったらそれでいいよね。
- 7)?東京に来れば、まずこれを買え！
- 7-1) 東京に来たら、まずこれを買え！(=4)

しかし、「なら」は、述べ立てモダリティとも遂行モダリティとも共起する。

- 8) 問題があるなら、解決すればいい。

---

4) 命題内容領域とは、モダリティを持たず命題のみが現れる場合を指すもので、命題内容領域内の文とは命題のみが現れる文のことをいう。

9) 太郎が行くなら、あなたもいっしょに行きなさい。

以上の、それぞれの条件形態とモダリティ形式との共起関係は次のようになる。

<表2>

モダリティ表示	簡略形	仁田の分類	表現形態
無	命題内容領域		「と」・「たら」
有	遂行 モダリティ	働き掛け	「なら」
		表出	「たら」 「ば」(制限有)
	述べ立て モダリティ	述べ立て	「ば」・「と」
		問いかけ	「たら」 「なら」

韓国語の条件形式「-면(myeon)」は、述べ立てモダリティとも遂行モダリティとも共起するが、命題内容領域内に現れることはない。だから、日本語の「と」と「たら」が命題内容領域内に現れる場合に対応する韓国語の形態は、「니까(nikka)」、「-자(ja)」、「-더니(deoni)」、「-(어・아)쓰더니((eo・a)ssdeoni)」である。

10) 信子がドアの前に立つと、ドアが開いた。

10-1) 노부코가 도어 앞에 서니까(nikka), 자(ja), 문이 열렸다.

11) 彼は新橋駅を出ると、すぐ神田をめざして歩いた。

11-1) 그는 신바시역을 나오더니(deoni), 바로 칸다를 향해서 걸었다.

12) 火事の跡を見に行たら、何か光るものがあった。

12-1) 화재가 났던 곳을 보러 갔더니((eo・a)ssdeoni), 뭔가 빛나는 것이 있었다.

しかし、条件形式「-거든(geodeun)」は遂行モダリティとだけ共起する。

13)×서울에 가거든(geodeun) 남산타워가 있다.

14) 학교가 가기 싫거든(geodeun) 교장선생님을 만나보아라.

この「-거든(geodeun)」は、話し手自身が条件として提示した状態や行為が成立するという

可能性を信じている表現であるが、「-면(myeon)」は中立的である。つまり、条件の成立に対する話し手の信頼に差がある。これが、「-다면(damyeon)」になると、「-면(myeon)」と同じく、述べ立てモダリティとも遂行モダリティとも共起する。特に、「-다면(damyeon)」は聞き手側の情報が話し手側の情報かによってモダリティとの共起も変わってくる。

- 15) 엄마가 온다면(damyeon) 뭐든 다 할 것 같다.
- 16) 부산에 간다면(damyeon) ktx로 가라.
- 17) 어제 네가 왔다면(damyeon) 더 재미있었을 텐데.

このような共起関係を図示すると、次のようになる。

<表3>

モダリティ	簡略化		仁田の分類
	無	命題内容領域	
有	遂行モダリティ	働き掛け	「-면(myeon)」
		表出	「-다면(damyeon)」 「-거든(geodeun)」
	述べ立てモダリティ	述べ立て	「-면(myeon)」
		問いかけ	「-다면(damyeon)」

以上から、話し手側の情報を条件とする形態には「ば・と・たら」と、「-면(myeon)・-다면(damyeon)・-거든(geodeun)」があり、場合によっては話し手側の情報を条件とすることもあ  
るが、聞き手側の情報を条件とする形態としては「なら・-다면(damyeon)」があることが分  
かる<sup>5)</sup>。

5) 本稿は、条件表現における述べ立てモダリティの条件形態について分析を行った金慶恵(2013)に後続するものとして、分析における同一な基準の適応という立場から、2.条件表現を表す表現形態の類型別分類は、金慶恵(2013), pp.8-16で提示した内容に遂行モダリティに関する内容を加えてまとめ直したものである。

### 3. 条件文に現われる遂行モダリティの条件形態

遂行モダリティとは、前件の条件節が満たされたら、後件の遂行命題の実現を拘束することを表す。条件文における遂行命題は文の結果となり、条件文における前件は遂行文の条件となる。遂行文の構造は、次のようになる。

<表4 > <遂行文>



条件表現における遂行モダリティの表現形態は、2. で確認したとおり、日本語は「ば・たら・なら」であり、韓国語は「-면(myeon)・-다면(damyeon)・-거든(geodeun)」である。この章では「ば」と「たら」を中心に考察し、「なら」については、4. で考察することにする。また、韓国語の場合、「-면(myeon)」は条件の事態に対しては中立的で、「-다면(damyeon)」は事態を仮定してその結果を推定する必要があるかどうかということによって「-면(myeon)・-거든(geodeun)」と区別される形態であるので、遂行モダリティと関連しては、仮定性を含まない遂行モダリティに最も適格である「-거든(geodeun)」を中心に考えていくことにする。まず、「ば・たら」から考えていく。

#### 3.1 遂行モダリティの条件形態としての「ば・たら」

述べ立てモダリティにおいては共に用いられた「ば」と「たら」であるが、遂行モダリティにおいては次のような類似点と相違点がある。

- 18) 暇があれば、掃除をしましょう。
- 18-1) 暇があつたら、掃除をしましょう。
- 19)×薬を飲めば、早く寝ます。
- 19-1) 薬を飲んだら、早く寝ます。

以上の例文に現れる「ば」と「たら」の違いは同一動詞の場合における意志表現に関わる問題

である。前件の述語が、18)と18-1)のように、状態を表す表現で「-意志」の場合は「ば」でも「たら」でも成文になるが、19)と19-1)のように動作を表し、「+意志」表現の場合は、「たら」では成文になり、「ば」では非文になる。これは「ば」が状態を条件として行為を要求する場合は使えるが、動作を条件として行為を要求する場合は使えないということである。遂行モダリティの文は、前件と後件が時間的前後関係にある個別的な事柄に関する表現であり、「ば」の持つ論理性という性格からも適していない。このような場合は個別的で、かつ、遂行モダリティの制限がない「たら」が適していると言える。このように、「ば」と「たら」は述語の特性によって使い方が決まる。次は、韓国語の場合について見ていく。

### 3.2 遂行モダリティの条件形態としての「-면(myeon)・-거든(geodeun)」

「-거든(geodeun)」は、韓国語の条件を表す形態のなかで非仮定的な事柄を表し、遂行モダリティとの呼応が最適な形態であると言える。この「-거든(geodeun)」と「-면(myeon)」は述語の特性や人称のような環境における相違が見られる。

- 20) 내가 돌아오면(myeon) 너는 가거라.
- 20-1) 내가 돌아오거든(geodeun) 너는 가거라.
- 21) 머리가 아프면(myeon) 약을 먹어라.
- 21-1) 머리가 아프거든(geodeun) 약을 먹어라.
- 22) 그이가 돌아오면(myeon) 가겠다.
- 22-1) 그이가 돌아오거든(geodeun) 가겠다.
- 23) 너는 약을 먹으면(myeon) 바로 자거라.
- 23-1)×너는 약을 먹거든(geodeun) 바로 자거라.
- 24) 더 이상 말을 듣지 않으면(myeon) 자르겠다.
- 24-1)×더 이상 말을 듣지 않거든(geodeun) 자르겠다.
- 25) 내가 돌아오면(myeon) 같이 갑시다.
- 25-1)×내가 돌아오거든(geodeun) 같이 갑시다.

「-면(myeon)」は、話し手と聞き手の事情や状況に構わず、聞き手の行為を要求したり、話し手自身の行為を拘束したりすることができる。つまり、述語の特性や人称とは関係なく、自由に遂行モダリティと共に起するということである。しかし、「-거든(geodeun)」について見ると、20-1)のように、話し手自身の行為を条件として聞き手の行為を要求する場合

と、21-1)のように、聞き手の状態を条件として聞き手の行為を要求する場合は成文になる。しかし、22-1)のように、第三者の行為を条件とすることは可能であるが、23-1)のように、聞き手の行為を条件として、聞き手に行為を要求する表現を表すことはできない。また、24-1)のように、聞き手への警告の意味を含めて、聞き手の事情を条件とする場合、話し手自身の行為を拘束することはできない。これは、「-거든(geodeun)」が聞き手の不都合な事情や利益に配慮がない形態であるとも解釈できる。また、「-거든(geodeun)」は、25-1)のように、話し手自身の行為を条件として、話し手と聞き手の両者の行為を拘束することもできない。以上のことから、「-거든(geodeun)」は述語や人称における制限を持っていて、遂行モダリティのみと共起することが分かる。「-거든(geodeun)」は「-면(myeon)」に比べて統語論的に制約があり、語用論的にも「-면(myeon)」とは異なる性格を持っている。では、「-거든(geodeun)」の属性について見ていこう。

### 3.3 遂行モダリティと条件形態「-거든(geodeun)」

「-거든(geodeun)」は、常に、後件に遂行モダリティが現れる条件形態であるが、遂行モダリティと共起するとはいっても、すべての遂行モダリティと共起するわけではない。以後、「-거든(geodeun)」と遂行モダリティとの共起関係について見ていく。

#### 3.3.1 「-거든(geodeun)」と時制

遂行モダリティの時制は常に現在から未来にかけて現れるが、「-거든(geodeun)」は時制を表す先語末語尾<sup>6)</sup>との接続が可能であるため、いろいろな時制表示が可能で、時制を表す語尾が接続していない「-거든(geodeun)」は「たら」に対応するが、過去・完了を表す「(어・아)ㄴ(eo・a)ss)」が接続した「-(어・아)ㄴ거든(eo・a)ssgeodeun)」は「ていたら」、「たなら」に対応する。

26) 그가 오거든(geodeun) 너는 가라.

26-1) 彼が来たら、あなたは行きなさい。

27) 그가 왔거든(eo・a)ssgeodeun) 너는 가라.

6) 韓国語において、活用の場合の最後にくる語尾である語末語尾の前に現れる語尾を指し、時制を表すものとしては、「-는(nun)-」、「-았(ass)-」、「-더(deo)-」、「-겠(ket)-」のようなものがある。

27-1) 彼が来ていたら、来たなら、あなたは行きなさい。

26)の「-거든(geodeun)」には、「前件が成立した後で後件を実現させよ」という、時間関係が関与している。しかし、27)の前件は、発話時において既に成立していることを意味する。「-(어・아)쓰거든((eo・a)ssgeodeun)」に対応する27-1)の「たなら」も「-(어・아)쓰거든((eo・a)ssgeodeun)」と並行的な意味に捉えることができる。それが、

28) 그가 왔거든(eo・a)ssgeodeun) 이것을 전해 주어라.

28-1) 彼が来ていたら、来たなら、これを伝えてあげなさい。

28)のように、前件の主体が後件にまで関わる場合は、発話時においては、完了の事態、もしくは未来の事態になるが、遂行時としては過去になる。それは、話し手が前件の条件を確認している状態ではないので、すでに成立している条件なのか未来に成立する条件なのかは分からないが、「-(어・아)쓰거든((eo・a)ssgeodeun)」は「たら」の時制と同じく、前件が成立した後に後件が実現することを表すものであるからである。しかし、以下の例文を見よう。

29) 그가 오거든(geodeun) 가겠다.

29-1) 彼が来たら、行く。

30)×그가 왔거든(eo・a)ssgeodeun) 가겠다.

30-1) 彼が来ていたら、来ていたら、行く。

29)の話し手は条件成立の確認者でもあり、遂行者でもある。29)が成文になるのは、発話時においては条件がまだ成立しておらず、話し手が条件の成立を確認していないからだと思われる。つまり、発話時においては、話し手が成立していない事態が条件となっていて、「発話時→条件成立時→確認時(知覚時)→遂行時」の時間の流れの順に進むからである。しかし、30)の前件の条件は「-(어・아)쓰거든((eo・a)ssgeodeun)」によって既に成立していることになり、話し手がそれを確認済みであるということになる。それで、条件成立の確認済みである場合は自分の行為を拘束することができないので、前件と後件における時間の流れは、「条件成立時→確認時(知覚時)→発話時→遂行時」の順になり、非文になるのである。つまり、「-거든(geodeun)」は、時制表示と関連して、条件成立時と発話時との順序

によって成文か非文かが分かれるということである。次は、「-거든(geodeun)」と人称との関係について見よう。

### 3.3.2 「-거든(geodeun)」と人称

「-거든(geodeun)」は、典型的に、命令者たる話し手と、遂行者たる聞き手と、条件節の主体たる第三者を必要とする。つまり、人称と深く関わっているのである。

- 31) 머리가 아프거든(geodeun), 이 약을 먹어라.  
 31-1) 頭が痛かったら、痛いなら、この薬を飲みなさい。  
 32)×머리가 아프거든(geodeun), 약을 먹겠다.  
 32-1) 頭が痛かったら、薬を飲もう。

31)は、話し手が聞き手の状態を前件の条件として「-거든(geodeun)」で提示する文である。この場合は「たら」の他に、聞き手側の情報を受ける表現形態である「なら」も対応する。しかし、32)のように、話し手の状態、つまり、話し手自身の行為を拘束する表現を「-거든(geodeun)」で表すことはできない。つまり、「なら」ではなく「たら」が対応するということは、「なら」と「-거든(geodeun)」が聞き手側の情報を表す形態であることを意味することであり、それは、話し手自身の行為に対する表現はできないということにつながる。「-거든(geodeun)」は、33)のように、聞き手側の行為を条件として提示し、聞き手に行為を要求する表現に用いられる形態であると言える。

- 33) 학교에서 돌아오거든(geodeun) 숙제를 해라.  
 33-1) 学校から帰ってきたら、宿題をしなさい。

しかし、34)と35)のように、聞き手側の行為や状態を条件として提示し、聞き手に行為を要求する表現を表すことはできない。

- 34)×이따가, 네가 오거든(geodeun) 나는 가겠다.  
 34-1) 後で、あなたが来たら、私は帰る。  
 35)×더 이상 말을 듣지 않거든(geodeun) 자르겠다.  
 35-1) これ以上言うことを聞かなかったら、くびにするよ。

また、「-거든(geodeun)」は、話し手の行為を条件として提示し、聞き手の行為を要求する表現を表すことはできるが、36)のように、話し手自身の行為を条件として提示し、話し手と聞き手の両者の行為を拘束する表現を表すことはできない。さらに、37)のように、聞き手の状態の事情を条件として提示し、話し手自身を含む聞き手の行為を要求する表現を表すこともできない。

36)×내가 돌아오거든(geodeun) (나랑) 같이 갑시다.

36-1) わたしが帰ってきたら、(私と)いっしょに行きましょう。

37)×시간이 없거든(geodeun) 택시로 갑시다.

37-1) 時間がないなら、タクシーで行きましょう。

このように、「-거든(geodeun)」は、話し手が自分の行為を拘束する場合は「条件節の主体≠話し手=行為者」になるだけで、「条件節=話し手=行為者」になることはない。しかし、聞き手側の行為を要求する場合は「条件節の主体≠聞き手=行為者」と、「条件節の主体=聞き手=行為者」になる場合とがあり得る。

### 3.3.3 「-거든(geodeun)」と情報性

「-거든(geodeun)」は、遂行者に聞き手を含む37)のような表現に現れると非文になる。もし、「-거든(geodeun)」が聞き手側の情報を条件とする形態であれば、遂行者に聞き手を含む37)が成文になるはずである。しかし、

38) 시간이 없거든(geodeun) 택시로 가거라.

38-1) 時間がなかつたら、ないなら、タクシーで行きなさい。

以上のような構文が成立するのを見ると、「-거든(geodeun)」が聞き手側の情報を条件としていないということが分かる。では、次の例を見よう。

39) 영수가 오거든(geodeun) 나는 가겠다.

39-1) ヨンスが来たら、来るなら、私は行く。

40)×영수가 왔거든(eo · a)ssgeodeun) 나는 가겠다.

40-1) ヨンスが来た　、私は行く。

39)が成文になるのは、発話時において、前件の事態は成立しないし、話し手もそれを確認していない、ある事態を「-거든(geodeun)」が条件として提示しているからである。このような構造を持つ文に、40)のように、「-(어・아)쓰거든((eo・a)ssgeodeun)」が現れると非文になるのは、「ヨンスが来た」という、既に確認されている条件が再び条件になるからである。「-거든(geodeun)」は、常に、「前件に立つ条件の事態を話し手が確認していない」状態を表現対象にしている。このような構文に現れる「-거든(geodeun)」は「なら」と対応関係にあるように見える。確かに、「-거든(geodeun)」は日本語の「なら」と「聞き手が提供した情報を条件とする」という性格で通じる面があるが、「なら」とは違って、話し手自身と条件の確認との関係が関わっている形態なのである。つまり、「-거든(geodeun)」は、聞き手側が提供した情報を条件とすることだけに頼る形態ではないということで「なら」と弁別される。

### 3.3.4 「-거든(geodeun)」と事実性

条件文の前件の命題内容は発話時において、すでに実現されている場合もあるが、その実現が確認できない場合がある。しかし、「-거든(geodeun)」は、発話時において、すでに実現されている事実の場合、あるいは実現が確実である事実の場合にのみ使われる傾向がある。

41) 그가 오거든(geodeun) 전화해라.

41-1) 彼が来たら、電話しなさい。

42) 그가 왔거든((eo・a)ssgeodeun) 나한테 보내라.

42-1) 彼が来ていたら、来たなら、私のところに来るように言いなさい。

43)×해가 서쪽에서 뜨거든(geodeun) 나를 찾아오너라.

43-1) 日が西から昇ったら、私を訪ねてきなさい。

41)の「-거든(geodeun)」と42)の「-(어・아)쓰거든((eo・a)ssgeodeun)」は、前件の命題内容が「+事実性」の事柄であり、43)の前件である命題内容は「-事実性」の事柄である。前件の持つ事実性、または確実性という特性は条件成立の可能性が高いということであり、その可能性は後件の実現にも直接影響するものである。このような事実性は実現可能な条件となり、命令や要求を導きやすい。崔在喜(1992)は、このような「-거든(geodeun)」の事実性に関して、

‘-거든(geodeun)’が形成する条件関係はS1が事実として強く予定されているときの関係と言える。従って、‘-거든(geodeun)’の意味機能は「条件構成」であると規定され、その内的特性は「強い事実性」を持つものと思われる。7)

と、指摘している。この場合、対応する「たら」と「なら」はすべての可能世界を条件としているのに比べ、「-거든(geodeun)」は条件の範囲が実現性のある世界に限られ、時間の流れによって条件が確実に事実として成立する場合として使われている。それ故、43)のように、「日が西から昇る」のような、非現実的な事柄を条件とすることはできない。「-거든(geodeun)」は、話し手の行動を拘束したり、聞き手に対して具体的な行動を要求したりする条件形態なので、非現実的で仮想性の強い事柄を条件とすることはできないのだと思われる。そのため、44)のように、「12時になる」という、実際に存在して確実に実現される事柄を条件とする場合は「たら」と「-거든(geodeun)」で表現が可能である。

44) 12시가 되거든(geodeun) 전화를 해라.

44-1) 12時になったら、電話をしなさい。

44-2) 12時になるなら、電話をしなさい。

しかし、「なら」は、44-2)のように、既存の事実を条件として提示することはできない。崔鉉培はこのような「-거든(geodeun)」を「事実拘束形」8)と名付けている。

### 3.3.5 「-거든(geodeun)」と遂行性

「-거든(geodeun)」が現れる条件文は、後件の発話によって支配される遂行文である。これは、「-거든(geodeun)」が文末に話し手の意志や約束など、聞き手に対する命令などの表現を要求するということに起因するものと思われる。

45) 학생과에 가거든(geodeun) 서류를 받아오세요.

45-1) 学生課に行ったら、書類をもらって来てください。

46) 날이 밝거든(geodeun) 떠나거라.

46-1) 夜が明けたら、発ちなさい。

7) 崔在喜(1992)『国語의 接続文 構成 研究』塔出版社, p.124 (韓国語の資料の日本語訳は筆者による。)

8) 崔鉉培(1997)『우리말본』正音社, p.297

のように、「-거든(geodeun)」は依頼と命令文に現れる。しかし、次のように、警告や脅迫のような文を表すことはできない。

47)×그런 말을 하거든(geodeun) 용서하지 않겠다.

47-1) そんなことを言ったら、言うなら、許さない。

48)×더 이상 멋대로 하거든(geodeun) 자르겠다.

48-1) これ以上勝手にしたら、するなら、首にする。

거든(geodeun)は、遂行モダリティとしか共起しない形態であるが、それ以外の文末表現形式と共起することもある。例えば、以下のような、許可、誘い掛け、理由表現である。

49) 다 먹지 못하거든(geodeun) 남겨도 좋다.

49-1) 全部食べられなかったら、残してもいい。

50) 그가 오거든(geodeun) 갈까요?

50-1) 彼が来たら、行きましょうか。

51) 민정이가 오거든(geodeun) 보낼 테니까.

51-1) 민정이가来たら行かせるから。

いままでの考察で、「-거든(geodeun)」が命令範疇の表現に関連していると思われたが、以上のような文末表現とも共起する。これは「命令法+等位接続詞+後件」のような、いわゆる擬似命令文で、命令文と同じ構造をしていながら、命令特有の力を持たず、「남겨(namgyeo)+도(do)+좋다(jota)」「(残してもいい)」、「가(ga)+ㄹ까(l kka)+요(yo)」「(行きましょうか)」、「보내(bonae)+ㄹ 테(l te)+니까(nikka)」「(行かせるから)」の構造で、命令形に許可、誘い掛け、理由表現をつけ加えて述べる場合である。白樂天(2003)は、このような「-거든(geodeun)」に関して、

話者の事由と関連して、話者の行為を前提にして、譲歩的条件をなすため、後行節が話者と無関係な内容の叙法である場合は制約があり、~9)

と、遂行モダリティと話者との関連について述べている。つまり、話し手の行為との関係によって遂行モダリティでも非文になる場合があるということである。

9) 白樂天(2003)『国語의 統合形 接続語尾』図書出版月印, p.235

以上は「ば」と「たら」に焦点を当てて、対応する韓国語の条件形態「-면(myeon)」と「-거든(geodeun)」を主に見てきた。次は「なら」について見ていくことにする。

#### 4. 「なら」条件文とモダリティ

モダリティに関する研究は後件の文末に集中しており、従属節におけるモダリティに関しては先行研究が少ないので、後件の文末表現としてのモダリティ表示と前件の場合も含めて、考えて見たいと思う。

一般的に仮定条件文は恒常条件文とは文の構造が異なり、恒常条件文の場合は「条件-結果」的構文として、モダリティ表示が許されないが、仮定条件文の前件と後件はそれぞれ独立しているので、命題の外におけるモダリティ表示となる。前件のモダリティには、前件の命題に対して話し手が仮定条件表現として取り立てるための最小限の表現が現れる。

52)×たぶん、食べるだろうなら、こしらえてあげる。

53)×大和撫子らしいなら、本物の日本女性だ。

仮定条件文は、前件の命題に対して断定・推量のような表現をすることができない。それは、仮定と断定という表現が、同一句や同一節内に共存すること自体が矛盾するからである。だから、52)のような推量表現、53)のような陳述性の高いモダリティや情態副詞等が現れることはできない。高山善行(1987)も次のような指摘をしており、

<仮定する>ことは、断定的に述べられた事態についてのみ可能であって、事態を<推量する>ことは共存しないのであろう。<sup>10)</sup>

と述べている。このような現象に対して、網浜信乃(1990)は、「なら」節に他者の意向・主張が関与するという従来の先行研究を踏まえて、

ナラという形式がそうした意味を本来的に持っているのではなく、聞き手から得た新規の情報をマークするためのものであるため「他者の意向・主張」といった意味合いを帯びやすい。<sup>11)</sup>

10) 高山善行(1987)「従属節におけるムード形式の実態について」『日本語学』6-12, 明治書院, p.87

と述べている。この論は、本来の「なら」の機能からして、仮定条件文の前件のモダリティ表示の解釈とも一致するものである。仮定と断定の関係は仮定と推量の関係以上に相容れないものである。それで、54)の「ように」、55)の「連用形+そう」のような様態、可能表現のみが現れ得る。

54) 先生のようになら、何とか真似だけはできると思うよ。

55) 食べられそうなら、明日もまた買ってくるよ。

このように、前件におけるモダリティ表示には制約がある。しかし、話し手の意思表示は、56)のように、文末において、自由に表示される。

56) 他人といてこれだけ楽しいなら、実の娘と暮したらどんなにか楽しいだろうか。

仁田義雄(1980)は、

「ナラ」に対する帰結表現には、話し手の判断や評価を表すものは許されるが、事実の単純陳述を表すものは許されない。<sup>12)</sup>

と、与えられた事柄を現実的なものとして敘述する後件は「なら」の条件表現の帰結表現にはなり得ないことを指摘している。仮定条件文の後件のモダリティ表示は話し手の意思表示になるから、57)のように、発話・伝達のモダリティである意志・願望・希望・命令・誘い掛けのような遂行モダリティと、58)のように、現象描写・判断のような述べ立てモダリティによる表現が妥当である。

57) もし郵便局に行くなら、ついでに切手を買って来てください。

58) あなたがそう言うなら、そうなのでしょう。

以上のように、「なら」は述べ立てモダリティとも遂行モダリティとも共起する。しかし、述べ立てモダリティと共起する場合と、遂行モダリティと共起する場合とでは、その性格

11) 網浜信乃(1990)「条件節と理由節-ナラとカラの対比を中心に-」『待兼山論叢日本学編』24, 大阪大学文学部, p.36

12) 仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院, p.38

が異なる。これは、「なら」が話し手側の情報と聞き手側の情報を条件とすることに大きく関係している。前件が話し手側の情報であることを表す「なら」は仮想的な事態の依存関係を問題にする。反面、聞き手側の情報であることを表す「なら」は聞き手の発話を受けてそれを一応確認しようとする繰り返しの役割をするものと思われる。確認する対象は必ずしも聞き手の発話とは限らない。三上章(1963)が、

組立てのsuru naraは、スル ki ナラ、スル yo ナラ、スル no ナラなどのローマ字などが落ちたもののように考えたらよい。13)

と述べているように、「ki, yo, no」が暗示するような、聞き手の意図や意見のようなものが窺えれば「なら」文は成立する。話し手側の情報を条件とする「なら」は話し手自身の判断を導くために想定するので、「仮定」のものと同名付けることができるし、聞き手側の情報を条件とする「なら」は話し手自身の決意や聞き手への命令を表すための背景を設定するので、「設定」のものと同名付けることができる。「仮定」のものは、59)のように、主に非現実的な事態を表すのに使われるが、それが唯一の用法ではない。「設定」のものも、60)のように、確定的な事態を表すのによく用いられるが、それもまた唯一の用法ではない。重要なのは誰の情報を情報とするのかである。

59) 生まれ変わるなら、男に生まれたい。

60) 「私が大統領になる？」

「私が大統領になるなら、あなたに大臣のポストをあげるよ。」

59)と60)の前件は非現実的な事態を条件としているが、59)は、話し手側の情報を含んでいるので、「仮定」のものになる。60)は、聞き手側の情報を含んでいるので、「設定」のものになる。このような「なら」の文は、必ず、意志、願望、依頼、命令表現を表さなければならない。「仮定」のものは話し手側の情報を条件としているので、61)のように、述べ立てモダリティを取ることが多い。しかし、61)の場合は、「仮定」とも「設定」とも解釈できる用例である。一方、「設定」のものは聞き手側の情報を前提にしているので、62)のように、遂行モダリティを取ることが多い。

13) 三上 章(1963)『日本語の構文』くろしお, p.101

- 61) 彼の言うことが正しいなら、彼は犯人ではない。
- 62) 図書館に行くなら、この本も返してください。

62)のような遂行モダリティは「設定」に限られる。これを図示すると、<表 6 >のようになる。

<表5>

	前件	後件
仮定	+話し手側の情報	述べ立てモダリティ
設定	+聞き手側の情報	述べ立てモダリティ 遂行モダリティ

以上の「なら」とモダリティの考察結果を総合的に図示すると、<表 7 >のようになる。

<表6>

	「仮定」の「なら」	「設定」の「なら」
条件の対象	話し手側の情報	聞き手側の情報
共起するモダリティ	述べ立てモダリティ	述べ立てモダリティ 遂行モダリティ
用法	話し手の仮定を表す	聞き手の発話(意図)を確認
	推測の根拠	判断の根拠
置き換え	「とすれば」	「とすれば」
		「のなら」

## 5. 終わりに

本稿では、日本語の条件表現に現われる複数の条件形態を、韓国語との対照から、文末のモダリティという表現意図に焦点を当てて、遂行モダリティを中心に考察した。考察の結果をまとめると、以下のようになる。

日本語の条件表現の場合、遂行モダリティと共起する条件形態は、主に「ば・たら」であり、韓国語の形態は「-면(myeon・-거든(geodeun)」が対応する。条件形態が現れる遂行モダ

リティでは、前件と後件の事態が緊密な関係にあればあるほど、後件の実現可能性が高くなるが、このような性格を持つ構文には「ば」より「たら」の出現頻度が高い。それは、「たら」が「ば」より事実的であるということも条件成立の可能性を高めている要因であり、だから、遂行の可能性が高くなるのである。反面、対応する韓国語の形態「-면(myeon)」は、話し手と聞き手の事情や状況とは関係なく行為を要求することができるので、用い方に制限はない。しかし、「-거든(geodeun)」は、話し手に関わる事柄の場合は<条件節の主体≠話し手=行為者>、聞き手に関する事柄の場合は<条件節の主体≠聞き手=行為者>の等式が成文の条件となる。また、前件には聞き手側のことだけが条件であり、後件には話し手に関わった意志表現などができないという、人称における制限があり、用い方に制約がある。しかし、「なら」は、述べ立てモダリティにも遂行モダリティにも用いられる形態であり、聞き手側の情報ばかりでなく、文環境によっては話し手側の情報も条件として提示できるという特徴がある。

以上の結果を対照研究の立場からまとめ直すと、日本語の条件表現に現れる形態「ば・と・たら・なら」は、述べ立てモダリティとも遂行モダリティとも共起するが、前件と後件の事態の動機付けによって用い方が異なり、「と」のように、遂行モダリティとの共起に制約があったり、「と・たら」のように、命題内容領域にとどまることができるなどの意味の違いも現れる。しかし、「なら」は、従属節の表現の多様さと時制表示の点で「ば・と・たら」とは違う独特な面がある。このような日本語の形態に対応する韓国語の「-면(myeon)」は、「ば・と・たら・なら」と違って、述べ立てモダリティとも遂行モダリティとも共起するが、条件表現にしか現われることができない。そして、「-거든(geodeun)」は、条件表現においても仮定性のない遂行モダリティとしか共起しないし、用いられるときも、人称における制限がある。対照考察の結果を表にまとめると、以下のようになる。

<表7>

モダリティの度合いと種類			条件形態						
			日本語の形態			韓国語の形態			
有	高	遂行モダリティ	たら	なら	ば	と	「-면(myeon)」	「-다면(damyeon)」	「-거든(geodeun)」
	低	述べ立てモダリティ							
無	命題内容領域								

**【參考文獻】**

- 白樂天(2003)『国語의 統合形 接統語尾』図書出版月印, p.35  
崔在喜(1992)『国語의 接統文 構成 研究』塔出版社, p.124  
崔鉉培(1977)『우리말본』正音社, p.297  
仁田義雄(1980)『語彙論的統語論』明治書院, p.38  
金慶惠(2009)「日本語と韓国語の条件表現の対照研究」首都大学東京人文科学研究科, 日本語教育学博士学位論文, pp.340-363  
金慶惠(2013)「対応する韓国語の形態から見た日本語の条件表現を表す形態の表現意図-述べ立てモダリティを中心に-」『日本言語文化』第26輯, 韓国日本言語文化学会, pp.8-16  
高山善行(1987)「從属節におけるムード形式の実態について」『日本語学』6-12, 明治書院, p.87  
綱浜信乃(1990)「条件節と理由節-ナラとカラの対比を中心に-」『待兼山論叢日本学編』24, 大阪大学文学部, p.36  
仁田義雄(1989)「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版, p.22  
三上 章(1963)『日本語の構文』くろしお, p.101

---

논문투고일 : 2014년 09월 10일  
심사개시일 : 2014년 09월 20일  
1차 수정일 : 2014년 10월 08일  
2차 수정일 : 2014년 10월 14일  
게재확정일 : 2014년 10월 19일

---

<要旨>

일본어 조건표현에 나타나는 수행 모달리티의 조건형태

- 대응하는 한국어의 형태를 통해 -

본고는 일본어 조건문의 표현의도에 초점을 맞추어 대인적 모달리티를 중심으로 고찰했다. 대인적 모달리티 문에는 주로 [ba · tara]가 나타나고, 한국어는 「면 · -거든」이 대응한다. 조건형태가 나타나는 대인적 모달리티 문에서는 선행절과 후행절의 관계가 긴밀할수록 후행절의 실현가능성이 높아진다. 이러한 성격을 갖는 구문에는 [tara]의 출현빈도가 높다. [tara]가 명제내용영역에 나타나는 것도 조건성립 가능성을 높이는 조건에 든다. 이 경우에 대응하는 「면」은 화자와 청자의 사정이나 상황과는 관계없이 행위를 요구할 수 있는 형태이므로 사용제한이 없다. 그러나 「거든」은 화자에 관한 사항의 경우는 <조건절의 주체≠화자=행위자>, 청자에 관한 사항의 경우는 <조건절의 주체≠청자=행위자>의 등식이 조건이고, 후행절에는 화자와 관계된 의지표현 등이 가능하지 않다는 인칭의 제한이 있다. [nara]는, 대사적 모달리티와 대인적 모달리티 모두와 함께 나타나며 청자 측의 정보 뿐 아니라 문 환경에 따라서는 화자 측의 정보도 조건으로 제시할 수 있다. 일본어 조건표현에 나타나는 형태 [ba · to · tara · nara]는 대사적 모달리티와도 대인적 모달리티와도 함께 나타나는데, [nara]구문은 다양한 표현의 종속절이 나타나고, 시제표시 면에서도 [ba · to · tara]와 다른 면을 가지고 있다. 대응하는 한국어 「면」은 대사적 모달리티와도 대인적 모달리티와도 함께 나타나지만 조건표현만을 나타낸다. 그러나 「거든」은 조건표현에서도 가정성이 없는 대인적 모달리티와만 함께 나타나며 인칭제한이 있다.

The Morphology of Condition of Performativity Modality Found in Japanese Conditional Expression

- Focusing on corresponding Korean morphology -

This study is studying Performativity modality focusing on Japanese expressional intension in conditional sentences. In usual, [ba · tara] are found in Performativity modality sentence, corresponding to Korean 「-myeon」 and 「-geodeun」. In Performativity modality which has conditional expression, the more closer the relationship between antecedent clause and following clause, the higher the realistic possibility of following clause becomes. Sentences with this feature has a high possibility of [tara]. It is one of the conditions which makes the possibility of materialization of conditions higher for [tara] to have practical scope of meaning. In this case, there's no limitation of using the corresponding 「-myeon」, because it is the form that can require action regardless of the situation of the speaker or listener. However, for 「-geodeun」, there is the condition for the speaker, <the agent of conditional expression≠the speaker=the agent>, and <the agent of conditional expression≠the listener=the agent> for the condition for the listener. Moreover, there's limitation on the Performativity expression that the intentional expression related to the speaker is not possible in the following clause. [nara] can be used with both objective and Performativity modality and suggest not only the information of the listener but the information of the speaker as a condition according to the sentence. The form of [ba · to · tara · nara] in Japanese conditional expression can occur with both objective and Performativity modality. [nara] is in the dependent clause in a variety of expressions and has the difference with [ba · to · tara] in the aspect of tense expression. Its corresponding Korean 「-myeon」 can occur with both objective and Performativity modality, however, it's only limited to the conditional expression. Moreover, 「-geodeun」 occurs with Performativity modality that doesn't have the subjunctive mood and has limitation on the Performativity expression.